

〈論 説〉

中華民国と日本国愛知県・名古屋市の 歴史的交錯およびその諸相

——汪兆銘・蔣中正・松井石根を中心に——

キーワード：日中交流史、アジア主義、汪兆銘、蔣中正、松井石根

王 晟 旭

はじめに

1911年、ある意外により、辛亥革命の狼煙が上がった。そして、中華民国という国名は、それからこの世界に登場し、今年（2024年）までおよそ112年が経た。周知の如く、中華民国の建国の経緯は、極めて紆余曲折であり、日本側との関係も緊密なのである。そして、建国以降、中華民国と日本の関係も幾度となく大きな試練に見舞われてきた。歴史の系譜を冷静沈着に鳥瞰すると、この両国のつながりはまさに「殺し愛」といってもよいだろう。

たまたま2023年1月初旬、中華人民共和国で香港俳優トニー・レオン主演の映画『無名』が上映された。この映画は、1940年代に風漸瀝とした上海で、汪兆銘南京国民政府、蔣中正重慶国民政府、大日本帝国皇軍及び延安共産党政権の間で互いにが繰り返り広げた死闘を描いている。面白いのは、実は汪も蔣も旧日本軍人一人の松井石根も日本国の愛知県・名古屋市とご縁が深いのである。ご縁とは、愛知県や名古屋市には、中華民国と深い関わりを持ち、多かれ少なかれ一般には知られていない遺構を残している。これらの遺構は、新たな角度から中華民国と日本の複雑な関係を浮き彫りにし、人生の妙味及び歴史において奇怪な交錯も見せていることは論を俟たない。従って、中華民国に着眼しながら日本愛知県名古屋市在住の筆者

は、この絶好の機会をかけて、在地における中華民国の姿を探し求めた。

一方で、愛知県とは、日本のほぼ中央に位置し、人口、一人当たり県民所得ともに日本有数の規模を誇る。製造業の面では、愛知県には日本が誇るトヨタ自動車の本社があり、三菱のような航空宇宙・軍事機器メーカーもある。歴史と文化の面では、愛知県は日本の戦国時代を代表する戦国三英傑：織田信長（名古屋市、稲沢市など説がある）、徳川家康（岡崎市）、豊臣秀吉（名古屋市）の出身地である。また、愛知県の県庁所在地としての名古屋市は、愛知県庁所在地である名古屋市にも、注目すべき歴史がある。名古屋には、日本三大名城のひとつである名古屋城や、旧帝国大学のひとつである名古屋大学がある。

一、悲運の文人・汪兆銘と名古屋大学

汪兆銘、当面の間までこの世を去ったのはもう80年（2024年）が経過した。彼は、今、中華民国にせよ、中華人民共和国にせよ、ないし全世界のほとんどの華人に「売国奴」と酷評されるようになった。その理由もほぼ極めて単純であり、即ち、1938年に国民政府のナンバー2とした汪は、突如重慶を離脱し、ベトナムのハノイに渡って日本との和平交渉を呼びかけ、「艶電」¹を発表した。その後、1940年に孫文の大亜細亜主義に基づいて、陥落地・南京で「還都」²を宣言して汪氏南京国民政府を樹立したのである。

『無名』の劇中で、汪の肖像画が登場し、トニー・レオンが「(汪にとって) 一体詩を書くのが楽しいのか、それとも人を殺すのが楽しいのか、私はよく分からない」という深い意味を持つセリフを口にする一幕があった。言うまでもなく、このセリフから汪一身上に存在する複雑で矛盾したアイデンティティの特質が垣間見えるだろう。だが、汪氏南京国民政府のこと、

1 汪兆銘著・南京国民政府編「艶電」、『汪主席和平建国言論集 上巻』、国民政府宣伝部、1940年、1-4頁

2 汪兆銘著「国民政府還都宣言」『汪精衛政治論述』時報文化出版、2019年、312—313頁。。

汪個人的な動機への忖度などことは、本文の視野と関係が薄いので、ここで議論しない。

ともかく日本の敗色の濃くなりつつある1944年には、汪も自分の終焉を迎えた。そもそも南京に赴き、陳璧君が胃がんかどうかを検査するよう命じられていた黒川利雄医師は、この時に病気で苦しんでいた汪の体を検査し、汪が発症した原因は、1935年、国民党六中全会の開会式で受けて摘出できなかった背中の中椎に残っていた凶弾が汪の健康状態をさらに悪化させていたと判断した上で、糖尿病の食餌療法に関する指示を残してから、日本に戻ったが³。1943年12月19日、汪は「弾丸を摘出し、今朝退院し」⁴、「だが、そのあと一か月ほどで、汪兆銘は突如歩行困難に陥ったのだ」⁵とある。なので、さらに治療のために汪は、妻の陳璧君、長男の汪文嬰、三男の汪文悌、長女の汪文愷・何孟恒夫婦という5人の親族、と秘書の周隆庠など随員と同行して日本愛知県名古屋市に向けて出発した⁶。そして、汪一行は、岐阜県各務原空港に到着した。そして、到着した当日（1944年3月3日）に、直ちに名古屋帝国大学に入院し、汪の主治医師団の組成は：外科 齊藤真（名古屋帝国大学 教授）、整形外科 高木憲次（東京帝国大学 教授）、名倉重雄（名古屋帝国大学 教授）、内科 勝沼精蔵（名古屋帝国大学 教授）、黒川利雄（東北帝国大学 教授）、放射線科 田村春吉（名古屋帝国大学 教授）、三矢辰雄（名古屋帝国大学 教授）、と助手団：戸田博（名古屋帝国大学 助教授）、上田文男（名古屋帝国大学付属医学専門部 教授）、中沢由也（陸軍軍医少佐）、太田元次（陸軍軍医大尉）という11人であり、汪の病名を「多発性骨髄腫」と診断された⁷。だからこそ、入院の翌日、手術を行った。汪は手術を受けた以降、体が極め

3 黒川利雄「汪精衛氏を思う」、『学士会会報』、719号、57頁。

4 周仏海著・劉傑など共訳『周仏海日記』みすず書房、1992年、629頁。

5 上坂冬子『我は苦難の道を行く 汪兆銘の真実 下巻』講談社、1999年、68頁。

6 何孟恒『曇煙散憶』時報文化出版、2019年、153頁。

7 名古屋大学医学部史料室所蔵史料、「汪兆銘（汪精衛）氏の入院」1944年、<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/archive/print/1944keizi.html>（2023年11月27日閲覧）。

て弱っており、ベッドから降りることができなかった。汪の主治医師団の一人黒川利雄は、1944年9月28日の日記「(前略) 余の意見としては、一、診断は多発性骨髄腫 二、予後は本病そのものとしては比較的良性的なれども、老年であり、糖尿病あり、楽観をゆるさず(後略)」⁸と認識している。

一方で、当時の名古屋には、よく米軍の空襲を受けていたため、汪の安全と回復後の療養・リハビリ生活のために、妻の陳壁君は名古屋千種区にある別荘の揚輝荘を視察した⁹。ここでは、少し揚輝荘について簡単に紹介していこう。揚輝荘とは、「松阪屋百貨店の創業者伊藤次郎左衛門祐民(一八七八—一九四〇)が、その主です。大正から昭和の初期に築き上げられたのです」¹⁰である。「揚輝荘という命名は、各方面にわたって造詣の深い伊藤次郎左衛門祐民が中国漢詩「四時」中の「秋月揚明輝」という句から「揚輝」二文字を引用したという説あるし、このあたりは月見の名所とされており月見坂町、観月町などの地名が残っていることから、天に輝く月を仰ぐという心境になぞらえたという説もある」、「昭和のはじめ当主の伊藤次郎左衛門祐民はこの揚輝荘にアジアから少年を招いて寄食させ、最高学府を卒業させて帰したと伝えられている」¹¹とある。

汪が来日の際には、揚輝荘の一隅の衆善寮で留学生の指導者兼寮長は三上孝基であり、彼が自分の日記には、「昭和十九年七月九日付で勝沼精蔵、齊藤真、名倉重雄の各教授らが汪兆銘の避難場所として揚輝荘を下検分に来た」、「梅号患者¹²、揚輝荘に入荘につき交渉あり」(七月二十四日)、「夫人と徐良が来荘」(七月二十九日)、また、「八月十一日の欄には、名古屋帝国大学の勝沼精蔵博士から三上孝基に、汪一家の子第に日本語を教

8 齊藤達雄・黒川利雄「汪兆銘に関する黒川利雄先生の記録の紹介について(下)」、『尚志』(会報)、第二高等学校尚志同窓会、42号、46頁。

9 名古屋市発行「図1-14 揚輝荘年表」、『揚輝荘聴松閣修復整備工事報告書』、ウエルオンラ会社印刷、2014年。

10 NPO法人・揚輝荘の会『揚輝荘と祐民』風媒社、2008年、3-4頁。

11 上坂冬子『揚輝荘、アジアに開いた窓—選ばれた留学生の館』講談社、1998年、20頁。

12 即ち汪兆銘。

えてやって欲しいと依頼」¹³と記入されていた。かつ、汪をかくまうすることのため、日本軍部は揚輝荘の下に大きなトンネルを起用しようとした¹⁴。つまり、つまるどころ、両方とも使わずに汪が1944年11月10日午後4時20分に名古屋大学医学部附属病院でこの世を去った¹⁵。

汪は最後に揚輝荘に泊まることはできなかったが、縁があったのは汪もこの別荘の主人と同じように、中国の古詩詞に深い興味を持っており、唐詩人の杜甫の「双照淚痕乾」という句から「双照」という二文字を抽出して、自分が広州での書齋を「双照楼」、と漢詩集を「双照楼詩詞稿」と命名したのである。政治家であり文学者でもある汪は、社会の発展のために



（愛知県名古屋千種区 揚輝荘及びトンネル出入り口 筆者撮影 2023年10月）
は両者の関係が必要だと考えた。即ち：「文学の役割は病気を指摘することであり、処方箋は政治学や経済学に求めなければならない。病気を指摘し、薬を処方する。その処方が正しいかどうか、効果があるかどうかは別

13 前掲書『揚輝荘、アジアに開いた窓—選ばれた留学生の館』、40頁。

14 「汪兆銘 幻の隠れ家」『中日新聞』、2005年12月29日。

「松阪屋創業家の別荘『揚輝荘』 トンネル出入り口発見」『中日新聞』、2007年3月14日。

15 太田元次『汪兆銘看護日誌抄』から抜粋 大洋堂、1988年、106—107頁。

の問題である。治療法を処方せずに病気を指摘するだけでは、患者に自分がいかに危険で、いかに死ぬかを説明するようなもので、患者を不安にさせるものではないか。もうひとつ、社会の冷たさを書き出すと同時に、社会の温かさも書き出しし、人々が常に社会を恨むように仕向けるべきではないというのが私の基本的な考え方だ」¹⁶とある。

汪が他界した翌日には、その柩と陳璧君らと共に愛知県の小牧空港から南京に戻った。これで、汪の今回の名古屋旅は全部で名古屋に254日間滞在したのである。また、汪が11月10日に往生したが、日本の各新聞紙は実は13日に汪兆銘の訃告を社会に流した¹⁷。

その後、陳璧君は、名古屋大学に感謝するために、3本の梅の木を贈った。なぜかという、実は梅は汪の大好きなものだ。生活の中で、汪は梅に対する強い感情を漏らしている。たとえば、1939年末、汪は当時日本の雑誌「改造」の記者であった小説家田村俊子に会った。のちに、田村の回想によると、汪の応接間の花瓶に梅が挿してあり、汪本人も彼女に自分の好きな花は梅だと言ったことがある¹⁸。汪が名古屋大学病院に入院中、使っていた枕に刺繍されていたのも梅の花であり、汪の看護は「梅号作戦」と命名された¹⁹。

梅とは、中国の文化で品行の高潔さ、不屈の象徴として文人に愛され続けていると同時に、中華民国の国花でもある。中国の伝統文化では、梅は蘭、竹、菊とともに「四君子」と呼ばれ、松、竹とともに「歳寒三友」とも呼ばれている。寒い冬には百花が散り、梅だけが独り咲くため、梅も中国では品行の高潔さ、不屈の象徴とされている。また、梅は1928年に中華

16 汪文惺『我書如我師:汪文惺日記1937-1938:汪精衛與女兒探索救亡圖存之路』華漢電腦排版、2024年、57頁。

17 「汪国府主席逝去 近く国府葬きのふ南京へ帰還」『朝日新聞』、1944年11月13日。
「国府主席汪精衛閣下逝去」『中部日本新聞』、1944年11月13日。

18 田村俊子著・黒澤亜里子など監修『田村俊子全集』（第9巻）ゆまに書房、2017年、618—619頁。

19 前掲書太田元次『太田元次軍医の汪兆銘看護日誌抄』、18、50頁。

民国の国花に選ばれ²⁰、1949年に中国大陸での統治を終えて台湾に渡った後も、中華民国の国花として梅を堅持してきた²¹。今日に至るまで、梅の図案は中華民国のシンボルとなり、中華民国政府関連のロゴのマークとなることが多い²²。中華民国が梅を国花に選んだ理由は次の通り：「我が国の国花は梅である。梅には三蕾五弁があり、三民主義と五権憲法を代表する。しかも梅は冬の寒さを耐え、表現する堅貞と気丈で純潔という特徴は国民の見習べきものである。梅開五弁は、五族共和を象徴し、敦五倫²³、重五常²⁴、敷五教²⁵の意義を持つ、梅の「枝横」、「影斜」、「曳疎」、「傲霜」は同時に易経中の「元」、「貞」、「利」、「亨」の4種類の高尚な徳行を代表している」²⁶とある。

これら梅の木は今名古屋大学大幸キャンパスに植えられている。木の前には板があり、その上にはこう書かれている：

汪兆銘氏記念の梅

昭和十九年三月三日南京政府主席汪兆銘氏本院に入院 同年十一月十日
逝去さる

病名「多発性骨髄腫」

右を記念し汪家から梅三本を寄贈されたが一本は枯れ現在二本だけ残っている。これがそのうちの二本である。

20 温躍戈など『中国国花历史溯源探究』西南師範大学学报(自然科学版)、2016年41(11)、87—92頁。

21 「梅は中華民国国花と定められているが、梅だけは国花であり、事実上全国に公認され、政府に採用されている」、中華民国行政院、台（五三）内字第五〇七二七号指令（1964年7月21日）。

22 たとえば、中華民国総統府の府章、中華オリンピック委員会のエンブレムなど。

23 五倫は、儒教における5つの道徳法則であり、すなわち父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信である。

24 仁・義・礼・智・信という儒教の5つの徳目である。

25 父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝という儒教で人として守るべき五つの教えである。

26 中華民国・中華民国総統府ホームページ「中華民国総統府—国家象徴—梅花」
<https://www.president.gov.tw/Page/98>（2024年1月17日閲覧）。

今、梅の花が満開の季節になって、その二本の梅が万朶の花を開いて、その爛漫の様子は眼福なのだ。



(名古屋大学大幸キャンパス 汪兆銘氏記念の梅 筆者撮影 2021年6月)

二、機敏な武人・蔣中正と中正神社

『無名』の最後には、日本の敗戦によって戦犯となった旧日本軍人である渡辺は、自分が国民政府に優遇されただけでなく、蔣先生も岡村大将に共産党に対処するために国民政府の軍隊を訓練するのを手伝ってほしいと頼み、自分は岡村のリストの中にリストアップされたと語っている。この劇中で言及された「蔣先生」はまさに国民政府主席の蔣中正であり、「岡村大将」は日本の支那派遣軍総司令官の岡村寧次であることは間違いない。

しかし、おそらく人々が不思議に思うのは、確かに蔣の下に中国と日本が8年間も血みどろの戦いを繰り返した後、血で血を洗う敵同士であったはずの国民政府が、なぜ急に豹変して日本軍と助け合うパートナーになったのか、ということだろう。

この質問に対する答えは、筆者は愛知県にあると考えている。名古屋駅

からJRで38分ほど愛知県額田郡幸田町の幸田駅に到着できる。そして、幸田駅から東に45分ほど歩くと、三方を山に、一側を湖に囲まれた公園があり、その駐車場の隣に「中正神社」という小さな神社がある。中正神社境内には、神社の前には小さな廊下があり、廊下に「永懷蔣公」と肉太に揮毫した横額があり、拝殿の中には鏡と小さな銅像が祀られており、毎年4月5日（蔣の命日）には祭祀が行われ、神官のほか「白団」の親族も参加する。神社境内の看板には、由緒書があり、その内容は：

「当社は中華民国先總統蔣介石（中正）公を祀る神社である。蔣公は第二次大戦終了の当日、「怨に報いるに徳を以てせよ。それが中華民族の伝統である」と告示され「日本分割占領の反対、賠償金要求の放棄、天皇制維持、軍官民二百万人を即刻帰国せしめるの処置」をとられた。その結果、今日の日本がある。思えば敗戦国に対し、これほど寛大な処置をとった国主はなく「大恩に報いるに礼を以てすべき」とし、ここに一社を建立し、永代に感謝の誠を献ずるものであり、「怨に報いるに徳を以てする」は、世界平和の原理として、限りなく蔣公の徳を讃えて、その威徳を崇めるものである」とある。

このことから、日本人は終戦後の賠償金要求の放棄など政策、及び「以德報怨」というスローガンの提出のため、蔣に感謝して、蔣を祀る神社を日本に建てたことがわかる。それでは、日本と日本人の心の中での蔣氏の地位とイメージを理解するには、まず日本文化の中での神社という単語を理解しなければならない。日本の辞書『大辞林』によると、「神社 産土神、天神地祇、皇室や氏族の組神、国家に功労のあった者、偉人・義士などの霊を神として祀った所」とある²⁷。このように見ると、日本人の心の中では蔣がすでに神と同じ地位を持っているように見えるだろう。また、筆者の限られた知識で、日本の神社では、今、中国人を祀る日本の神社は四つの神社があり、即ち：秦の始皇帝を祀る京都市の大酒神社、徐福を祀

27 松村明など編集『大辞林』三省堂、2006年、1291頁。

る三重県の徐福ノ宮、溥傑家を祀る山口県の愛新覚羅社、そして最後は愛知県の中正神社なのである。

そして、蔣と「以德報怨」という説の歴史については、このようなものである。即ち：天皇裕仁が日本終戦を宣言する1時間前、蔣は国民政府の中央放送局のマイクの前で全国に通告し、世界に放送した「抗戦勝利告全国軍民及世界人士書」²⁸を發表し、日本に対する「以德報怨」という寛大な処理政策を明らかにした。後に「以德報怨」という政策の実行を具体的にという、おおよそ四つの面があり、即ち：1、200万人以上の日本軍民を無事に帰国させる。2、日本を分割することを阻止する。3、天皇制度を保留する。4、戦争賠償請求権を放棄する。この4点は客観的に言えば、戦争の失敗者であり、原爆を受けた日本にとって、確かに日本の国運の行方を大きく変え、影響している。

そのため、後の日本では、「蔣中正恩人説」が出てきた。しかも、岸信介、佐藤栄作のような日本の保守系政治家までもが蔣を称賛している。例えば、岸信介は「私はそのとき蒋介石総統に初めて会ったのです。そこで述べたことといえば、まず戦争終結に際して大陸の日本人、軍人あわせて約二百万人を無事に帰国させてもらったことを感謝した。いわゆる恨みに報いるに徳をもってせよという総統のお考えに基づいて戦後の日本の復興がなかったことを伝えました。それから、カイロ会談で日本の天皇制の問題が問われた際に、その問題は日本国民が決める問題でわれわれが決めるものではないし、タッチすべきでない、と。結局、天皇制の維持の基礎をつくられたこと、戦後の日本占領について分割占領に対しても蒋介石総統が反対されて北方地域にソ連が進出するということがなくなったことなど、今日の日本あるは実にあなたのおかげによるもので、日本国民は決してその恩を忘れないと、感謝の意を述べた」²⁹とある。

佐藤栄作は、「さきの戦争の『以德報怨』の言葉通りをなされた。我々

28 蔣中正「抗戦勝利告全国軍民及世界人士書」『中央日報』、1945年8月15日。

29 岸信介・矢次一夫・伊藤隆『岸信介の回想』文芸春秋、1981年、174頁。

に与へる感銘は勿論今更云ふ迄もない事」、「戦後総統の一言で皇室が安泰となり、我国も共同占領をされないで今日の繁栄がある、これ総統閣下のおかげである、然し現在は国交のない事が残念とのべる」³⁰とある。

蔣がこのような寛大な態度をとる理由として、日本側は表面的にこれが蔣の徳性の高尚さなのか、孫文の大アジア主義を遵守し継承しているのかなどと呼ぶことが多い。また、蔣本人は、「恨みに報いるに徳を以ってせよという考えは実は自分が若いとき日本に留学した際、武士道の精神を当時とくに頭山満先生、犬養先生といった方々から実践を通じて教え込まれたものだ。それは東洋思想の基本であると同時に、日本の精神であってそのことが印象的であった。だから、私に感謝するよりも、日本自身もっている諸先輩の精神に感謝してもらいたい」³¹と語っている。

だが、その裏側に決してそんなに単純ではないだろう。なぜかという、蔣の対日態度が決して親日派ではないだろう。例えば、蔣はよく天皇を「倭王」³²、日本軍人を「倭寇」³³と呼ぶ。また、スタンフォード大学が所蔵している『蔣中正日記』の原稿を読んだことがある人は、1928年の済南事変後、蔣は毎日の日記の冒頭にまず「雪恥」³⁴という二文字を書き、十数年に及ぶことを知っているだろう。このことから分かるように、国家指導者で軍人出身の蔣が実は日本に対する感情は極めて複雑である。

そして、1945年に日本に寛大な政策を取った理由を理解するには、当時の中国の局面を回顧しなければならない。まず、1945年に天皇の終戦宣言後、当時万里の長城以南の中国本土に残っていた支那派遣軍はおよそ105万6000人余りで³⁵、彼らがほぼ戦敗意識がなくてかつ完全武装していたと

30 佐藤栄作『佐藤栄作日記』（第六卷）朝日新聞社、1997年、336—337頁。

31 前掲書『岸信介の回想』174—175頁。

32 葉惠芬編『事略稿本（46）』国史館、2010年、262頁。

33 王正華編『事略稿本（40）補編』国史館、2015年、208—224頁。

34 1928年5月9日、蔣が日記で初めて雪辱に関する文字を書いた。即ち：「國恥、軍恥、民恥、今日加重二耻矣、何以雪之？」、その後は「雪恥」の二文字に簡略化されていった。スタンフォード大学『蔣中正日記』原稿。

35 日本・厚生省援護局『引揚げと援護30年の歩み』厚生省、1978年、45—46頁。

いう状態である。そのため、どのようにこれらの軍人を武装解除し、適切に処理するかということは、自然に戦争勝利後の国民政府と蔣がまず直面しなければならない問題となっている。これらの日本軍人に対して急進的な報復行動をとれば、大きな衝突が起りやすく、多くの不必要な死傷者が出ることは容易に想像できる。また、当時華北などでは、日本軍の相当部分が中国共産党の軍隊に直面しておりから、日本軍への報復行為は、日本軍と彼らの協力を促し、局面を複雑化させることもある可能性が高い。

2つ目は、蔣は日本との戦争が終わった後、中国共産党軍との戦いが再燃することと、日本軍と戦ってきたこの数年間、国民政府の軍隊は大きな打撃を受けたが、逆に中国共産党の軍隊はかなり成長したと事前に認識していた。そのため、日本に留学したことがある蔣は、日本軍人の助かりを獲得し、彼たちが国民政府の軍隊を訓練するのを助け、戦闘能力を高めて中国共産党軍に対抗することを望む。以上の2点は、蔣が日本に寛大な政策を取った主な原因と言えるだろう。

そして日本側にとっては、蔣の出発点が何であれ、やはりその寛大な政策の実施によって、数百万人の日本軍人が無事に本土に帰ることができ、家族と再会することができ、また日本に分割戦領や天皇制が廃止されるなどの悲運を回避することができたことは争わない事実なのであるだろう。そのため、日本中で庶民から政治家までが蔣に感謝の気持ちを抱いている。続いて、この感謝の気持ちの上で、日本側は桃を投じて李に報ゆ、一連のフィードバック行動を始めた。

現実面には、例えば、1948年に岡村寧次は、その罪の軽減と内地服役の件について、湯恩伯に対して蔣や何応欽への感謝を伝えた³⁶。その後、日本に帰国した岡村は（大将）の召集や協調のもと、富田直亮（少将）をはじめとする83人の日本の旧軍人が台湾に派遣された。1949年11月1日、富

36 岡村寧次著・稲葉正夫編「単独抑留入獄（上海）時代日記抄」『戦場回想篇』原書房、1970年、191頁。

田は台湾に到着し、3日に蔣と面会した³⁷。その後、富田らは1969年までの20年間にわたって中国名を用いて、台湾で軍事顧問活動を行っていたことが事実なのだ。しかも、台湾では富田直亮が使用していた名前は「白鴻亮」だったため、この軍事顧問団は「白団」と呼ばれていた。白団は台湾における中華民國軍の軍事思想と制度に深刻な影響を与え、蔣の高い賞賛と評価を得た³⁸。戦後の日本と中華民國及び蔣との絆をさらに深めた。これは、上述したように、『無名』という映画の最後の部分で演じられたストーリーの歴史的背景の由来である。と、今日に至るまでに、蔣の命日になるたびに、中正神社に白団の家族が集まって追慕する理由である。

精神面には、蔣に恩を感じる日本人は、日本に日華親善協会を設立し³⁹、岸信介の先頭に立って1986年9月に東京で「蔣公遺徳顕彰会」が設立され、当時の試験院長だった孔徳成が設立大会に出席した⁴⁰。10月にはこの会は初めて名古屋で蔣に対する記念大会を組織した⁴¹。もちろん中正神社の建立は、その中に最も代表的な外在的表現の一つである。しかし言わざるを得ないのは、近年の台湾で民主進歩党政権の執政の老朽化に伴い、台湾での蔣の地位とイメージは深刻な衝撃を受けており、これは間違いなく上記の蔣と関係のある日本側の団体と相關記念活動を微妙な立場に陥れていることである。

話は再び中正神社に戻ろう。上記の内容では、日本の岸信介ら総理大臣から大多数の一般民衆までが蔣に感謝の気持ちを抱いていることがわかっ

37 蔣中正『蔣中正日記（1949）』民国歴史文化学社、2023年、331頁。

38 蔣は富田を朱瞬水にたとえたことがある。蔣中正『蔣中正日記（1950）』民国歴史文化学社、2023年、189頁。

39 大阪日華親善協会「大阪日華親善協会設立趣意書」、<http://www.osakanikka.com/prospectus.html>（2023年12月19日閲覧）。

40 台湾国史館『蔣中正總統文物』「日本人士紀念蔣公遺徳顯彰會現場照片影集」、入藏登録号002000000194P。

41 台湾国家図書館「日本名古屋紀念蔣公百年誕辰舉行蔣公遺徳顯彰紀念大會」、<http://dava.ncl.edu.tw//MetadataInfo.aspx?funtype=0&id=193565>（2023年12月19日閲覧）。

たが、しかしながらこの中正神社の建立は一体誰の行為なのか。この問題を理解するには日本の現行神社体制にさかのぼらなければならない。

日本では、「神社本庁」という機関があり、この機関は「一九四五年の神道指令により国家から分離された神社を組織するため、翌年設立された宗教法人。伊勢神宮を本宗とし、全国大半の神社を包括する。地方組織として各都道府県に神社庁がある」⁴²ということである。宗教法人とは、「宗教法人は、教義をひろめ、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とする団体、つまり「宗教団体」が都道府県知事若しくは文部科学大臣の認証を経て法人格を取得したものです。宗教法人には、神社、寺院、教会などのように礼拝の施設を備える「単位宗教法人」と、宗派、教派、教団のように神社、寺院、教会などを傘下に持つ「包括宗教法人」があります。単位宗教法人のうち包括宗教法人の傘下にある宗教法人を「被包括宗教法人」、傘下でないものを「単立宗教法人」といいます、「2021年、日本全国の宗教法人の総数は179952であり、そのうち単立宗教法人の数は7221である」⁴³ということである。

中正神社は神社庁所属ではなく、単立宗教法人山蔭神道の本宮である貴嶺宮の敷地内に建立されている。つまり中正神社の建立者は単立宗教法人山蔭神道なのである。山蔭神道の創立者は山蔭基央である。山蔭基央は、「1925年生まれ、戦時中、国学を研究し、戦後、明治天皇外戚中山家を継承する古神道山蔭流宗家を相続し今日に至る」⁴⁴と自称している。山蔭は中正神社を建立した動機についてこう語っている：「日本に温存されていた「技術」の上に、アメリカは惜しみなく「ハイテク技術」を授けてくれたから、日本は世界に冠たる技術大国となり、経済大国に変身することができた。これひとえに蒋介石総統がとられた「対日政策」と、それに続い

42 前掲書『大辞林』、1291頁。

43 日本文化庁「宗教法人と宗務行政概要」、

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/shukyohojin/gaiyo.html>（2023年12月19日閲覧）。

44 張桂芳・山蔭基央共著「著者略歴」、『21世紀創造の原理:カイロ会談秘話』マネジメント社、1994年、表紙。

た「時局の神秘的転換」のお陰である。我々日本人は永世かけてこの事を忘れてはならない。それあるが故に、私は「中正神社」を建立し、これに蔣公の聖霊を招いて朝夕の礼拝を怠らないのである」⁴⁵とある。

中正神社の周りには桜が植えられているが、蔣の命日になると、まさに愛知県の桜が咲く季節でもあり、この際に中正神社の前には、満開になって散った零れ桜の一部が風に包まれて舞い、桜吹雪の絶景を形成する。そして一旦、風が止むと地面に落ちて桜の絨毯になる。残りの一部は遠くの湖に吹かれて花筏になって遠方へ漂っていく。



(愛知県額田郡幸田町 中正神社 筆者撮影 2022年4月)

三、無言の始末・松井石根と殉国七士廟

中正神社から南西方面に車を走らせて30分後、愛知県西尾市三ヶ根山という場所がある。麓から山頂に向かって出発する道のりの中で、山頂に近い位置に道の両側に岸信介の手書による殉国七士廟という七文字が刻まれ

45 前掲書『21世紀創造の原理:カイロ会談秘話』、199—200頁。

た大きな石柱門が立っているのが見つかり、さらに進むと道の果てに墓園があり、その中心にそびえ立つ墓石に殉国七士墓の5文字が刻まれている。殉国七士墓の近くに「殉国七士墓誌」や「殉国七士廟由来」という石碑が2つある。

「殉国七士墓誌」の正面には、

「米国の原子爆弾使用、ソ連の不可侵条約破棄、物資の不足などにより敗戦やむなきに至った日本の行為を米中英ソ豪加仏蘭新蘭印比十一ヶ国は、極東国際軍事裁判を開き事後法によって審判し票決により昭和二十三年十二月二十三日未明、土肥原賢二・松井石根・東條英機・武藤章・板垣征四郎・広田弘毅・木村兵太郎七士の絞首刑を執行した。

横浜市久保山火葬場よりその遺骨を取得して、熱海市伊豆山に安置していた三文字弁護士は、幡豆町の好意により、これを三ヶ根山頂に埋葬し、遺族の同意と、清瀬一郎・菅原裕両弁護士等、多数有志の賛同とを得て、墓石を建立した。

遙かに遠く眼を海の彼方にやりながら、太平洋戦争の真因を探求して恒久平和の確立に努めたいものである」と。

背面には、

「昭和三十五年七月十七日

極東軍事裁判

弁護士 スポークスマン

弁護士 林 逸郎 誌」とある。

「殉国七士廟由来」には、

「東條英機（元陸軍大将）

松井石根（元陸軍大将）

土肥原賢二（元陸軍大将）

板垣征四郎（元陸軍大将）

武藤章（元陸軍中將）

木村兵太郎（元陸軍大将）

広田弘毅（元総理大臣）

昭和二十年八月十五日終戦となった太平洋戦争（大東亜戦争）の責を問
い、アメリカ、中国、イギリス、ソビエト、オーストラリア、カナダ、フ
ランス、インド、ニュージーランド、フィリピン、オランダの十一カ国は
極東国際軍事裁判を開き、事後法に依り審判と評決によって右七名に対し
絞首刑を決定し、昭和二十三年十二月二十三日未明前記A級戦犯七名の絞
首刑が執行されたのである。当時としては命がけで火葬場から東條英機大
将を始めA級戦犯七名の遺骨を拾得しようと決心したのは、絞首刑の判決
が言い渡された昭和二十三年十一月十二日午後のことであった。なぜなら
ば各担当弁護士が遺体の家族引渡しの件でマックアーサー司令部を訪ねた
が了解を得る事ができなかったからである。このままでは遺体も遺骨も家
族には引渡されず極秘のうちに処分される事明白となるので、「罪を憎ん
で人を憎まず」という日本古来の佛教思想からしても、武士道精神として
勝者が敗者の死屍に鞭打つ行為は許されない。又日本の将来の平和探求の
ためにも日本国の犠牲者として罪障一切を一身に引受けて処刑される七名
の遺骨は残さなければならない。そこで遺骨だけでも家族に何とか渡した
い一念により大冒険が数名の有志で計画され、その事の実行に当たっては
綿密な計画を要したが、それには先ず計画の執行日を速やかに探知しな
ければと極東裁判米国検事某氏よりやっとの事で七名の刑の執行日はクリ
スマスの前日十二月二十三日で、火葬場も横浜市久保山火葬場と推察する
事ができた。横浜久保山にある興禅寺住職市川伊雄氏を通じ、久保山火葬
場長飛田美善氏の協力を得ることに成功した。しかし当日は米軍の監視
が厳重であり、一度は当初の計画通り七名の遺骨若干を一体ずつ別々に密
かに米軍の眼を盗んで奪取し、一応計画は成功したかに思われたが、飛田
氏がこれら遺骨の前の香台に日本人の習慣として供えた線香の匂いを不審
に思い、感づいた米軍人により、この遺骨は再び米軍に取り戻されてし

まった。しかし、その時遺骨本体は既にトラックに積み込まれた後であったので米軍も面倒と思ったのか、奪取した七名の遺骨を全部一緒に混ぜ、幸いにも近くにあった火葬場内の残骨捨場に遺棄して返ったのである。この時米軍が持ち去った七名の遺骨は全て粉碎し太平洋上に投棄されたとの風評があるがどの様に処理されたのか真偽のほどはわからない。そこで、翌二十四日はクリスマスイブであり、浮かれて米軍の見張りが手薄になる事を知った三文字正平弁護士と興禅寺住職市川和尚は、木枯らしの吹き荒れた。周囲は暗くても、灯火と物音は禁物である。骨捨て場の穴は深くて手が届くはずはなく、ひとが入れるような入口もないので思案の結果火かき棒の先に空き缶を結びつけ苦心して遺骨をすくい取ることに成功し、普通の骨壺一個にはほぼ一杯を拾い上げて密かに持ち帰った。見張りを気にして手探りで遺骨をかき集める作業は想像以上の大仕事であった。遺棄された真新しい真っ白の遺骨はまぎれもなくこの世に唯一の七名の遺骨であり、これを奪取することに成功したことは、三文字弁護士にとっては一生を通じ命を賭した熱き長き一日のできごとであった。こうして取得した遺骨は一時人目を避けて伊豆山中に密かに祭られていたが、幾星霜を重ねた後遺族の同意のもとに財界その他各方面の有志の賛同を得て、日本の中心地三河湾国定公園三ヶ根山頂に建立された墓碑に安置されることになり、昭和三十五年八月十六日静かに関係者と遺族が列席し墓前祭が行われたのである。

以来毎年四月二十九日の天皇誕生日の良き日に例大祭を行うとともに、時折遺族が訪れて供養し、又一般の人々や観光客が花を手向けて供養する数を増し、更に戦病死された戦没者の霊をまつる慰霊碑が数多く建立され、これら遺族や戦友も度々御参拝に参るようになり、世界平和を祈願する多くの人々により三ヶ根山スカイパークの名所としてクローズアップされてきた現在である。

昭和五十九年 十月三十一日 建立」

とある。

このほか、この墓地の境内には第三師団や第二十四師団などの部隊の慰霊碑が多数ある。また、ここの墓地の管理者は一般社団法人殉国七士奉賛会なのである。

この2つの石碑の内容を読むと、ここに埋葬されているのは、当時東京裁判で絞首刑に処せられた7人で、遺体が茶毘に付された後、茶毘場で働いていた日本人が混在していた7人の遺骨を密かに隠し、後に運び出して静岡県熱海伊豆山中に松井石根によって建立された興亜観音堂に秘密裏に保管した後、愛知県三ヶ根山に移したことが分かった。

そして、この7人の遺骨は現在愛知県に埋葬されているほか、この7人のうち1人は実は愛知県・名古屋や中華民国とももっと深い縁があり、この人がまさに松井石根なのである。

松井石根の先祖は遠州二俣城（今静岡県）の城主松井宗信⁴⁶だったが、松井石根は愛知県名古屋出身なのである⁴⁷。その後、松井は陸大に入り、この時歩兵第六連隊（名古屋）の中隊長として日露戦争に参加したが、負傷から復学した。この時の松井の思想は、同じ愛知県出身で日清貿易研究所⁴⁸の設立者、あわせて「日支連携運動」を提唱した荒尾精の影響を強く受けた⁴⁹。その後、中国に派遣された松井は孫文の大アジア主義に強く共

46 松井宗信は戦国大名今川義元の部下で、1560年に今川義元と織田信長が桶狭間で戦い、この戦いで今川と松井はともに戦死した。松井宗信の墓所は愛知県豊明市内の高徳院境内にある。

47 松井七夫述・井上五郎編『兄松井石根を語る』富士書房、1938年、12-13頁。

48 日清貿易研究所閉鎖後、その精神を継承した上では、前後に南京同文書院、上海東亜同文書院大学、現日本愛知県愛知大学を相次いで設立した。記念誌編集委員会編『瀝城に時は流れて』瀝友会、1992年。など資料に依った。

49 松浦正孝「大東亜戦争と大亜細亜協会及び松井石根」『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか：汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会、2010年、504—581頁。早坂隆「日中友好論者への道」『松井石根と南京事件の真実』文藝春秋、2011年、20—55頁。などに依った。

感じ、孫文を「肝胆相照した情熱の友達だ」と称している⁵⁰。1911年の武昌蜂起前、陸軍歩兵少佐だった松井は当時の陸軍少将宇都宮太郎の腹心となり、武昌蜂起後、孫文ら革命党に同情した宇都宮は、ひそかに当時三菱会社社長だった岩崎久弥と会談し、孫文の革命を支援するために岩崎から十萬円の資金を得、その後、松井は岩崎と宇都宮の間の秘密の連絡先となり、この金を受け取って中国革命に資金を援助した⁵¹。1927年に松井は下野して来日した蔣に「新しき善き支那の建設」のために種々勧告を述べ、蔣に大きな期待を抱いていた⁵²。1928年の済南事件と南京事件以降の中国に対して、松井は軍事的観点から中国が復興するためには軍縮が不可欠であり、日本軍は山東出兵が必要だと主張した⁵³。1933年、松井は近衛文麿、広田弘毅らが共同で「亜細亜の再建と統一」を目的とした大アジア協会を設立した⁵⁴。1934年8月、現役引退、予備役に入った。1936年、自費で中国を訪問し、中国で大アジア主義に関する講演を行い、また、蔣中正、孔祥熙、宋子文など多くの中国の要人と会談した。その中で、蔣と会見した際、中華民国に満州国の独立を認めるようという主張を提案したが、むしろ蔣に否定された⁵⁵。同年六月に旧友胡漢民の死去のため、松井は弔文の中に「霸道的独裁政治を排斥し、権道の共産主義を呪忌せる」、「支那同族の救済を念願するものなると共に、更に此の精神を汎く亜細亜の同種同文文化民族の間に拡充し、所謂王道的平等の精神に基き、亜細亜民族の団結

50 「中山陵に嘆きの一詩 空し・我が武士道 盟友孫文を想う松井將軍 歴史の輪廻に撫然」朝日新聞、1937年12月20日。

51 宇都宮太郎著・宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策：陸軍大將宇都宮太郎日記（1）』岩波書店、2007年、480—512頁。

52 前掲書『兄松井石根を語る』35頁。

53 松井石根「軍事上より観たる支那の現状」『支那事情講習録：昭和三年夏期講習』東亞同文會調査編集部、1929年、137—150頁。

54 松井石根著・田中正明編「大亜細亜協会創立趣意書」『松井石根大將の陣中日誌』芙蓉書房、1985年、260—262頁。

55 前掲書「西南遊記」『松井石根大將の陣中日誌』、252—257頁。

に達せんことを冀ふの至誠なり」⁵⁶など亜細亜主義の論調を再び出している。

だがしかし、次年度の1937年、松井は中支那方面軍司令官に任命され、名古屋師団（第三師団）をはじめとする上海派遣軍及び熊本師団（第六師団）をはじめとする第十軍を率いて上海付近で中華民国軍との作戦を開始した⁵⁷。

1938年1月29日、畑俊六は「支那派遣軍も作戦一段落と共に軍紀風紀漸く頹廢、略奪、強姦類の誠に忌はしき行為も少からざる様なれば、此際召集予後備役者を内地に帰らしめ現役兵と交代せしめ、又上海方面にある松井大将も現役者を以て交代せしむるの必要あり。此意見を大臣に進言致しをきたる」だった⁵⁸。その後、2月に畑俊六は上海に到着して新しい中支那派遣軍司令官となり、松井は日本に戻った⁵⁹。

日本に帰国した松井は、隣人だった日中両国が、戦争で多くの死傷者を出したことを痛感し、それを済度するために後継者の畑俊六に中国戦場から中日兵士の血肉に染まった土を運び、愛知県常滑市の陶芸家や彫刻家に頼んで観音像を焼いてもらい、興亜観音と名付け、静岡県熱海の興亜観音堂に奉納し、記念堂には日本側戦死者と中国側戦死者の位牌がそれぞれ祀られている。そして、松井自身は「怨親平等」という理念に基づいて興亜観音奉賛会を設立し、毎日麓の家から、山に登って観音堂に参拝して読経したという⁶⁰。又は、1945年に松井が処刑された後、興亜観音堂は夫人の松井文子が世話を続けた⁶¹。

56 松井石根著・野村幸一郎編「胡漢民君の死を悼む」『松井石根 アジア主義論集』新典社、2017年、216—218頁。

57 防衛庁防衛研修所戦史室「北支事変から支那事変への拡大」『支那事変陸軍作戦<1>昭和十三年一月まで』朝雲新聞社、1975年、397—406頁。

58 畑俊六著・伊藤隆など編『陸軍畑俊六日誌』みすず書房、1983年、120—121頁。

59 前掲書『陸軍畑俊六日誌』、121—124頁。

60 前掲書「興亜観音」『松井石根大将の陣中日誌』、281—323頁、前掲書「興亜観音」『松井石根と南京事件の真実』、221—245頁、宗教法人礼拝山興亜観音「興亜観音のご紹介」、「興亜観音リーフレット」、「興亜観音のいわれ（創建時 本修院道場主 伊丹忍礼）」<http://www.koakannon.org/page03.html>（2023年12月23日閲覧）。などに依った。

61 松井文子・林逸郎編著「観音堂とともに」『敗者：東条英機夫人他戦犯遺族の手記』二見書房、1960年、149頁。

また、一方で松井も同じく大アジア主義の提唱者である汪兆銘とも交際があった。1941年6月17日に汪は日本上陸だった⁶²。6月26日、松井は汪に観音像を贈った⁶³。次年、松井は南京を訪問して汪と会談した⁶⁴。

1948年12月23日、松井は、「衆生皆姑息 正氣弘神州 無畏觀音力 普明照亞州」⁶⁵という漢詩を残して、絞首台に上がった。

ちなみに、この7人が極刑に処せられたことを知った後、1948年12月24日の日記にも、蔣は次のように記している。

「昨日23日未明、日本の戦犯東條英機、松井石根、土肥原賢二、板垣征四郎、木村兵太郎、武藤章、広田弘毅など7人のA級戦犯が絞首刑になった。これは50年来の中国侵略の結果であり、日本に対する国辱はこれまで清算されたと言える。私の一生には革命のために奮闘する第一段階の苦志はすでに伸張されており、第二段階の共産党討伐の事業が所望を果たすことができるかどうか分からない」⁶⁶とある。

殉国七士墓の近くには、今は松が植えられている。日本には、古来から松を詩に詠んだり、神として崇拝したりする習慣があり、現代になってからも墓のそばに松を植える習慣があり、日本人は松が寒さや風雪に耐えられ、清潔さや汚れを取り除き、亡くなった人が幸福な転生力があると考えているからだ⁶⁷。

今、愛知県名古屋市中村区の椿神明社、緑区の桶狭間古戦場公園、知立市の知立神社境内に松井より揮毫した石碑がある。

62 「汪主席の上陸 国家に佇む第一歩」朝日新聞、1941年6月17日。

63 「沿線・歓迎の嵐 車窓に立詰め汪氏」朝日新聞、1941年6月26日。

64 「汪主席を訪問・松井中将・津田中将」朝日新聞、1942年11月21日。

65 早瀬利之『将軍の真実：南京事件—松井石根人物伝』光人社、1999年、316頁。

66 蔣中正『蔣中正日記（1948）』民国歴史文化学社、2023年、336—337頁。

67 有岡利幸『松と日本人』講談社、2022年、229—273頁。

四、未完の戦争

All wars are fought twice, the first time on the battlefield, the second time in memory⁶⁸

-----Viet Thanh Nguyen

2022年4月、中華人民共和国外務省は、謝長廷駐日台湾代表（当時）の親米・日本的発言に不満を抱き、「中華民族の利益を裏切ったもので、石敬瑭や汪精衛と何ら変わらない」と述べた⁶⁹。

2022年7月、ある中国人女性が中華人民共和国・南京の玄奘寺で松井石根らの位牌を奉納したことが中国で大きな波紋を呼んでいた。最後に、この事件はこの中国人女性が拘束され、松井石根らの位牌が撤去され、南京市宗教局など多くの関係責任者らが解任されたことで下火になった⁷⁰。

2024年4月、日本陸上自衛隊第32普通科連隊が投稿した公式X（旧ツイッター）に「大東亜戦争」の表現を使ったことは一時期日本でもニューストピックスに取り上げられ、世論に大きな波紋を投げかけた。その後、自衛隊が投稿を削除して、このことは政府側から正式に終了した⁷¹。

68 Viet Thanh Nguyen “Nothing Ever Dies: Vietnam and the Memory of War” Harvard University Press, 2017, pp.4.

69 中華人民共和国・環球網「国台弁痛批謝長廷堪比汪精衛：靠四处摇尾乞憐，換不来台海和平穩定」<https://m.huanqiu.com/article/47mc7WkyQIS>（2024年4月29日閲覧）。

70 日本・産経ニュース「中国・南京の寺に旧日本軍人の位牌 当局が調査」<https://www.sankei.com/article/20220723-URHBDQEY3JZMFKDLF3XU7FSGOE/>（2023年12月26日閲覧）。

日本・産経ニュース「寺に旧日本軍A級戦犯位牌で拘束 南京で中国人女性」<https://www.sankei.com/article/20220725-AIXKPRBVEZOMTO7C06X7NZO7BI/>（2023年12月26日閲覧）。

中華人民共和国・新華網「南京通報玄奘寺供奉侵華日軍戦争犯牌位事件調查處理情況」http://www.news.cn/local/2022-07/24/c_1128859878.htm（2023年12月26日閲覧）。

71 日本・産経ニュース「波紋を広げる「大東亜戦争」表記 禁止されていないが問題視され陸自部隊はX投稿削除」

<https://www.sankei.com/article/20240409-UT4I6R6EN5C2ZP6G5UZ4XU57RA/>（2024年4月29日閲覧）。

この節の冒頭で引用したベトナム学者Viet Thanh Nguyenが言ったように、どんな戦争にも二度あり、一度は戦場で、もう一回は記憶である。八十年前に汪と日本は惨敗を喫したが、二度目の戦争が只今進行中なのである。

五、小括

中華民国史と中日関係史に言及すると、汪兆銘、蔣中正、松井石根という3人の名前は、どうしても避けられないだろう。彼らに関連するキーワードも、従来から「抵抗か」「降参か」、「侵略か」「共栄か」という二分法の方向に傾倒しがちことが多い。さらに、このような二分法の指導の下で、彼らはより直接的に符号化され、例えば汪は売国奴で、蔣は抗日の指導者で、松井は極悪非道の殺人魔王であるようなラベルが彼らの体にしっかりとつけられ、取り外されないことはできない。あるいは、これらのラベルから離れているのを見たくない人がいるのではないだろうか。

大アジア主義の温床には、近代日中関係の理想的な遠景が派生していたが、大アジア主義の信者たちもそれぞれの理解に基づいて実践していた。しかしながら、中日双方の立場や自身の国情の違いにより、実際に施行される過程で、様々な意外により最終的には蹉跎した。これは、歴史の発展には不確実性があり、個人が歴史の過程で、如何に影響力を持っていても、歴史発展の傾向を完全に逆転することは難しいことを証明している。その敗者たちは、後世に軽蔑されたり無視されたりする対象にもなりがちであり、歴史の冷酷さを裏付けるものでもある。

しかし、歴史は同様に偶然に興味に満ちている。例えば、本文にはそれぞれの立場があり、さえかつて互いを敵と呼ぶこともある3人が、時間の次元的制限を突破し、ある程の意味で愛知県に集まることを実現し、中華民国と日本の絆を再現し、実現しなかった大アジア主義の夢を再構築したと言えるだろう。一方で、これはまるであの騒々しい紛争の中で、すべての遺恨を風にさらすべきだことを髻髷として述べている。



（愛知県知立市知立神社境内 松井石根より揮毫した石碑 筆者撮影 2023年12月）



（愛知県名古屋市緑区桶狭間古戦場公園境内 松井石根より揮毫した石碑
筆者撮影 2023年12月）

以上のように、歴史上の人物や事件の評価については、伝統的な「成王敗寇」という強者の論理から脱却し、客観的な歴史をもとに細瑾だけを顧



(愛知県西尾市三ヶ根山 殉国七士墓 筆者撮影 2019年7月)

みず、大域的に出発し、併せて一定の度量と理解の上で評価したほうがいいのではないだろうか。

後 書

昨年、梅見月のある日にカナダ・トロント郊外で張国燾の墓に拝謁した小生は、突如六花に見舞われ、心中に感無量に湧いた。すなわち、歴史とは、一体何ののだろうか。やはり般若心経に出てくる「不生不滅 不垢不浄 不増不減」という偈陀は、この疑問乃至この世界の真相を一言のもとに喝破したのではないだろうか。

R.O.C.114-03-09

R.6-03-09

於 プノンペン

04-29加筆